

## 宮城県室浜貝塚出土資料の研究 —角田コレクション紹介3—

### Study of Murohama shell mound in Miyagi prefecture.

吉田 泰幸 (YOSHIDA Yasuyuki)<sup>1)</sup>

1) 名古屋大学大学院文学研究科

Departments of History and Geography, Graduate School of Letters, Nagoya University.

#### Abstract

Murohama shell mound is the type site of “Murohama type pottery” Dr. Sugao Yamanouti had named. There are three important matters about materials of Murohama shell mound in Dr. Bunei Tsunoda Collection. First, one pottery was restored in an almost perfect condition. The material like that is very valuable. Second, broken pieces of pottery were unearthed from two spots and three stratigraphic positions. This is an important matter for studying change of pottery from earliest to early Jomon period at Tohoku region. Third, there were a few animal remains. This is an important matter for studying dietary habits at that time demonstratively. Those three are important for studying culture in early Jomon period at Tohoku region, so I mainly investigated potteries in detail and considered significance of these materials.

#### はじめに

名古屋大学博物館に寄贈された角田文衛博士コレクション（以下「角田コレクション」と略称）は、東北地方の縄文時代資料を中心としている。一部についてはすでに資料紹介をおこなっている<sup>1)</sup>。今回紹介するのは宮城県室浜貝塚出土資料である。

室浜貝塚は、東北地方太平洋岸中部に位置する松島湾内の宮戸島にあり、宮城県鳴瀬町宮戸字室浜浦口囲に所在する（図1・2）。角田博士が昭和11（1936）年8月に発掘調査をおこなった本資料の一部は、三森定男氏と連名で昭和14年に発表された「先史時代の東部日本」（角田・三森1939）の中で紹介されているが、詳細は未報告である。「昭和11年8月」ということは、石器の標本番号を記したラベルから判明したことである。

角田博士に先駆けて、山内清男博士が昭和4（1929）年に室浜貝塚の発掘調査をおこなっており（山内1930）、その資料を基に縄文前期初頭の土器型式である「室浜式」を設定した。したがって「室浜式」の標識遺跡としても著名である。山内博士の室浜貝塚出土資料は詳細が公表されておらず、その内容は、山内博士の記述から、宮城県柴田郡槻木町（現柴田町）に所在する上川名貝塚出土土器（加藤1951）を基にして設定された、「上川名上層式」あるいは「上川名Ⅱ式」と呼ばれる型式の内容と同様のものと推定されている。そのため、現在は「室浜式」という型式名称はほとんど用いられていない。その後、相原淳一氏によって「上川名Ⅱ式」は大木1式以前の複数型式を包含するものとして、複数の標識遺跡の設定を基に「上川名Ⅱ式」を5グループに細分し、それらが時期差であるとの見解を述べている（相原1990）。

角田コレクションにおける室浜貝塚資料は、山内博士が「体にはほとんど皆斜行縄文がある。その過

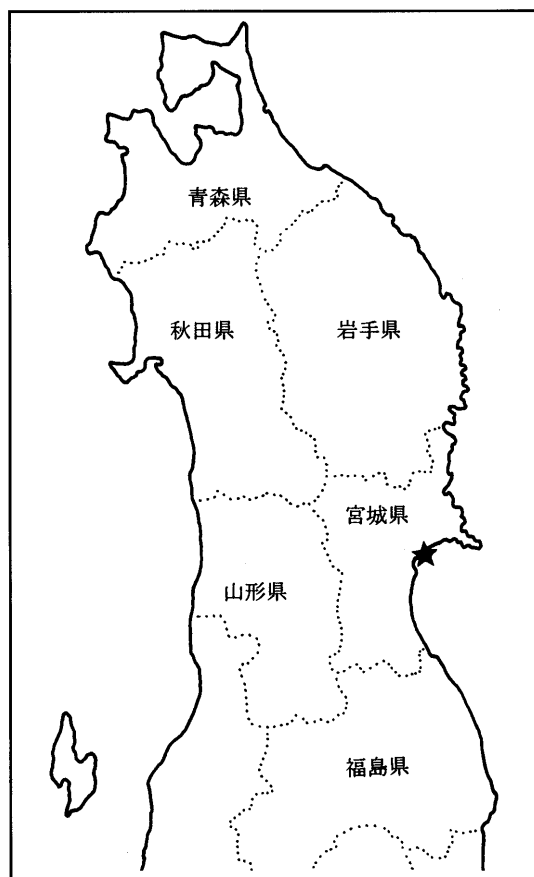


図1 室浜貝塚の位置 (★印)

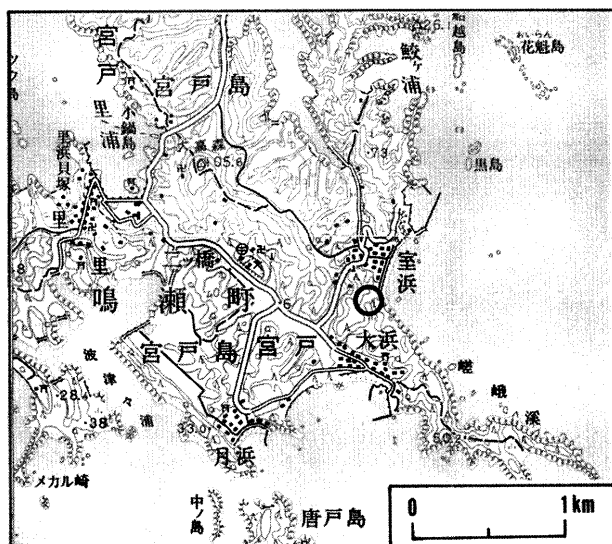


図2 室浜貝塚 (○印) 付近地形図

半は結束ある帯縄文である。口端には往々点列がある。口頸部の文様は少数に認められ、あるものでは整正な撚糸圧痕による文様があり、他のものには半截竹管様のものによる文様がある」とされた「室浜式」(山内1930)とは若干異なる様相を示している。角田博士は室浜貝塚の地名のうち、「浦口」の字名を用い、本資料をもとに「浦口式」土器を設定している

る(角田・三森1939)。「浦口式」は「舟入島下層式」と「舟入島上層式」の間に位置付けられたが、型式名称として定着するに至らなかった。

しかし本資料をコレクション目録作成のために整理する過程において、従来知られていなかったことがいくつか判明してきた。まず、口縁部から底部まで接合が可能で、全形が復元できる土器が1個体見出されたことが特筆される。さらに、本資料が複数地点および複数層位出土資料から構成されていることも判明した。ただし、それらの地点の位置と層位の上下関係を厳密に特定できる記録類は残念ながら残っていない。しかし、復元個体を得たことと、角田博士報告時には断片的な紹介にとどまっていた土器群を提示することは、今後の研究に資するところが大きいと考え、資料提示とともに若干の考察をおこなうのが本稿の目的である。

### 室浜貝塚出土資料の概要と土器の分類

角田コレクションにおける室浜貝塚資料には、「い地点第2層」という注記が付された資料と、「ろ地点第2層」、「ろ地点第3層」という注記が付された資料、および注記のみられない資料とがある。これらには多数の土器片の他に、少量の石器と自然遺物も含まれる。石器は3点みられ、「ろ地点」と注記がなされている。しかし全体として、前述のとおり残念ながら当時の角田博士の記録が残っておらず、詳細を知ることができないのが惜しまれる。注記が付されていない土器片、自然遺物については、出土地点不明資料として扱う。

数量的に主体を占めるのは土器片であり、縄文前期初頭に位置づけられる資料が多い。これらはすべて回転縄文を主たる文様とするもので、明確な口縁部文様帯をもつものはごくわずかである。また、器

形が判明したものは復元個体である尖底の深鉢形土器 1 個体のみであり，その他の土器片も底部形態に問題は残るものの，文様等からみて復元個体と同様の深鉢形土器の破片であると考えられる．したがって，回転縄文の種類をもとに口縁部破片資料と底部破片資料の分類をおこない，その組成を確認することで，本資料における縄文前期初頭土器群の内容を検討していくことにする．

土器群は次のように分類される．

I 群：羽状縄文を主文様とするもの．それらはさらに次のように細分される．

A 類：横位の羽状縄文が帯状にほどこされるもの．1 点のみ斜位にほどこされたものもある．さらにつぎのように細分される．

A 1 類：口縁部に文様帯をもつもの．

A 2 類：口縁部に文様帯をもたないもの．

B 類：撚りの異なる単節斜行縄文を左右に配することによって羽状縄文を呈しているもの．

II 群：斜行縄文およびそのバリエーションと考える縄文を主文様とするもの．それらはさらに次の 4 類に細分される．

A 類：斜行縄文．複節，単節，無節のものがみられる．さらにつぎのように細分される．

A 1 類：口縁部に文様帯をもつもの．

A 2 類：口縁部に文様帯をもたないもの．

B 類：単節斜行縄文の原体末端，あるいは側面にも環を作り出したいわゆる「ループ文」を主文様とするもの．さらにつぎのように細分される．

B 1 類：口縁部に文様帯をもつもの．

B 2 類：口縁部に文様帯をもたないもの．

III 群：組紐回転文を主文様とするもの．

IV 群：結節回転文を主文様とするもの．

そのほか胴部が無文，あるいは小破片のため胴部文様が不明の底部破片を V 群とし，次のように細分する．

A 類：底面に網代の圧痕をもつもの．

B 類：底面に葉脈圧痕をもつもの．

C 類：底面が無文のもの，および小破片のため底面の状況が判断できないもの．

これらの分類をもとに，「い地点第 2 層」，「ろ地点第 2・3 層」，「地点不明」の順に資料提示をおこない，石器，自然遺物についてもその構成を記す．



写真 1 い地点第 2 層出土の復元土器

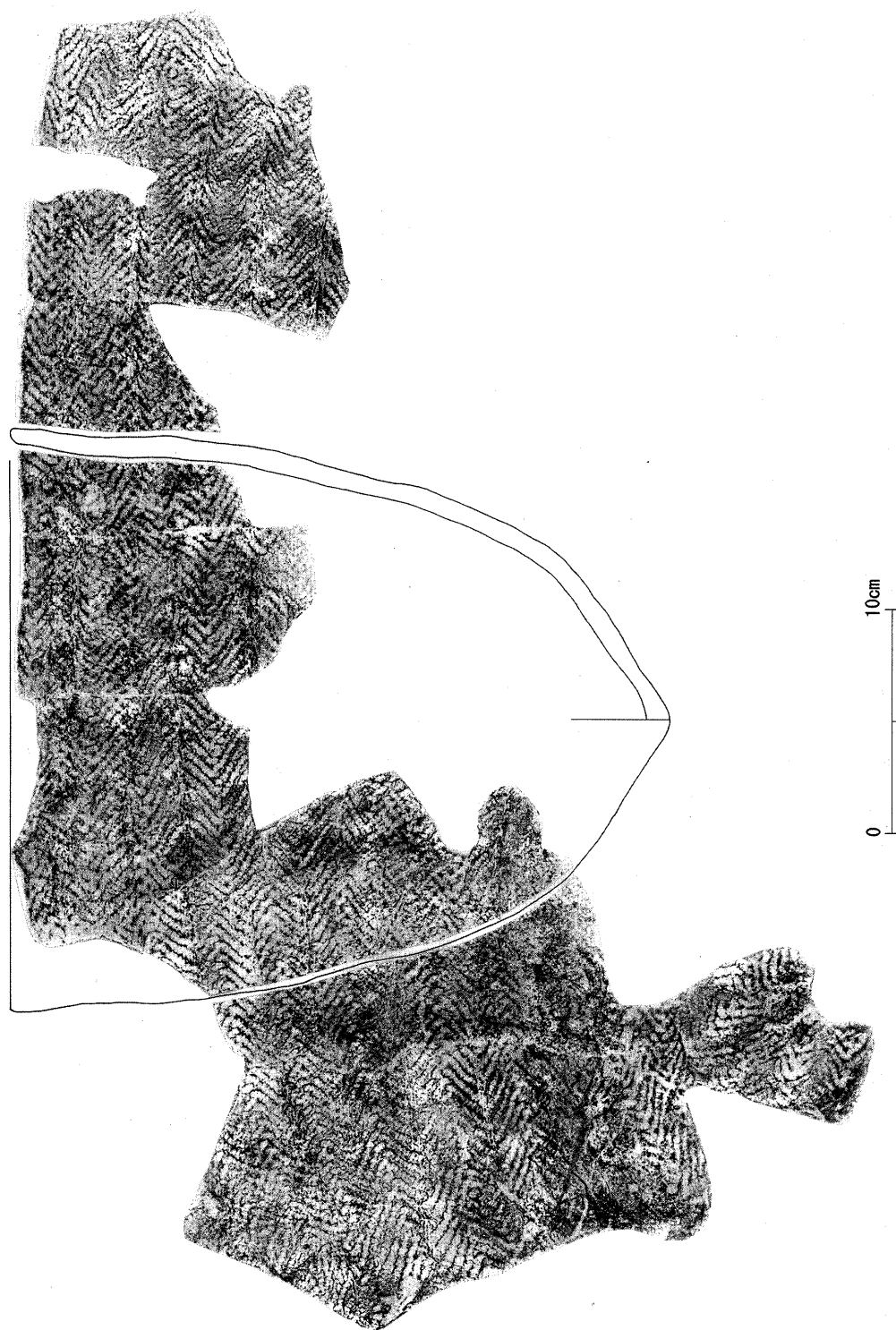


図3 い地点第2層出土土器実測図（縮尺3分の1）

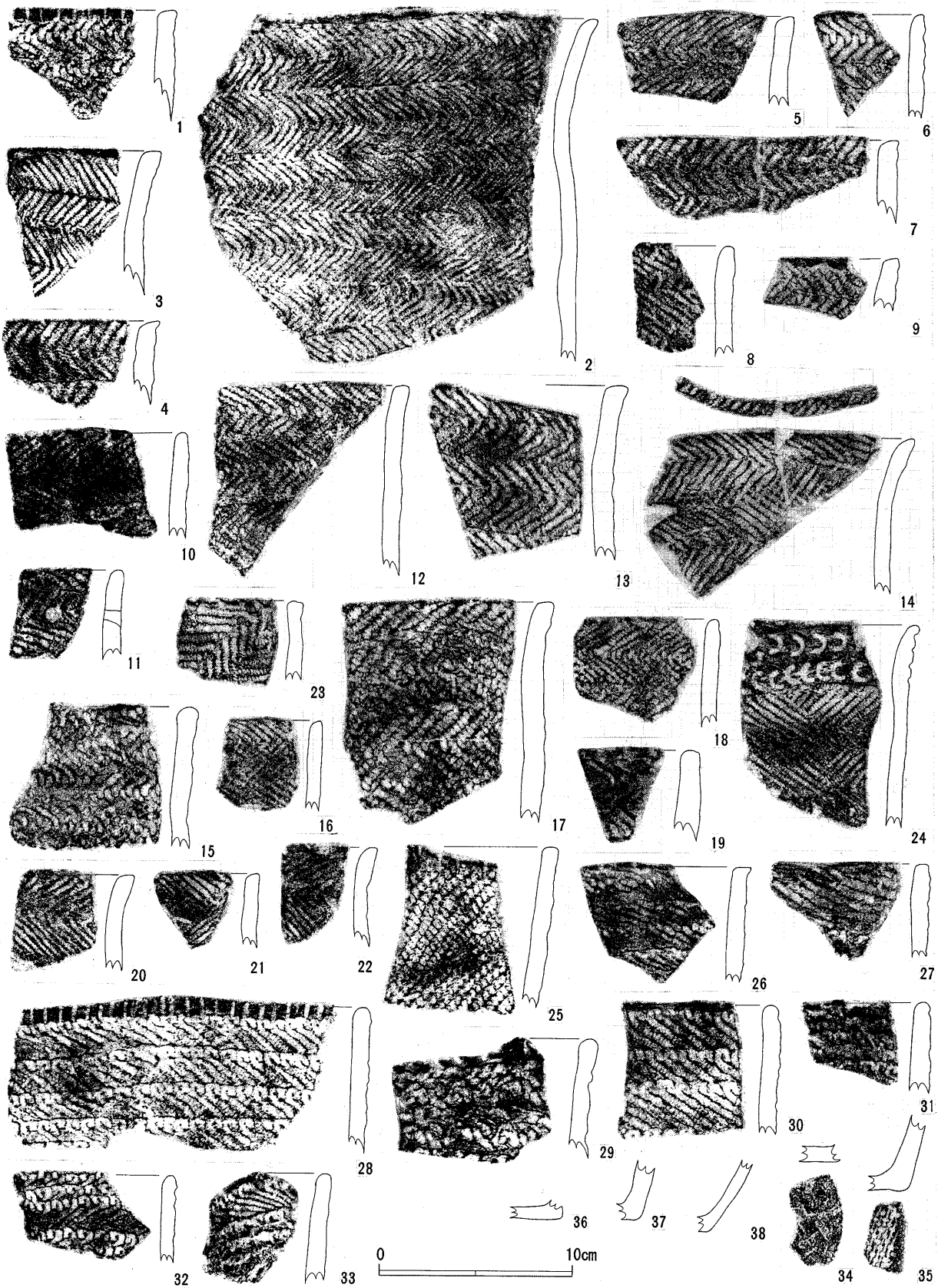


図4 い地点第2層出土土器片拓影（縮尺3分の1）

1：Ⅰ群A1類，2～23：同A2類，24：同B類，25：Ⅱ群A1類，26・27：同A2類，28・29：同B1類，  
30～33：同B2類，34・35：Ⅴ群A類，36～38：同C類。

## い地点第2層の土器

全形が復元された個体（図3，写真1）が見出されたのはこの層である。器形は丸底に近いが，乳房状の突起をもつ尖底土器と言える。口径25.8cm，高さ29.4cmである。前項に掲げた分類ではI群A2類に相当する。原体末端の他条結縛部が明瞭である横位の結束羽状縄文が，带状に何段も，口縁部から底部近くに至るまで全面にほどこされている。尖底である底部附近は，胴部同様の羽状縄文が底部頂を中心に放射状にほどこされている。全体に繊維混入の痕跡が顕著にみられた。色調は口縁・胴部は褐色であるが，底部付近は赤褐色である。また，底部附近にほどこされた縄文は明瞭であるが，その上部に明瞭ではない一帯がある。尖底土器を煮沸に供する場合には，五徳状の石に据えて用いることが想定される。その場合に石に接すると考えられる部分において文様が不明瞭であることと，色調の変化とは，頻繁に煮沸に供された結果であると考えられる。

若干の縄文中・後期土器片を含む土器片の構成は口縁部片38点，胴部片175点，底部片5点である。復元個体と同一時期と考えられる口縁部片33点を，前項に示した分類ごとに示す。なお，これらにはいずれも繊維混入の痕跡が顕著に認められた。

I群A1類：1点（図4-1）。復元個体同様，原体末端の他条結縛部が明瞭な結束羽状縄文が横位にほどこされている。口縁部文様帯は非常に狭く，等間隔に短い沈線が縦位にほどこされるのみである。

I群A2類：22点（同2～23）。そのうち14点（同2～14・23）は，復元個体，A1類と同様に，原体末端の他条結縛部が明瞭である。波状口縁を呈すものが1点（同13）ある以外は全て平らな口縁である。その中で口唇部にも縄文がほどこされるものは1点（同14）のみである。その他の個体（同15～22）は他条結縛部が明瞭ではないが，短い縄文原体を用いる点では同様である。1点のみ，羽状縄文が斜位にほどこされたものがあり，口唇部に連続的な押捺がほどこされている（同23）。結束された羽状縄文は10点みられた（同2・5・6・8・12・15～19）。

I群B類：1点（同24）。この例のみ口縁部文様帯が他に比べ広い。半截竹管様の施文具によるC字形と逆C字形の爪形文が2列，横位にほどこされている。文様帯以下は撚りの異なる単節斜行縄文を左右に配することによって羽状縄文を呈しており，この点がA類とは異なる。

II群A1類：1点（同25）。I群A1類と同様に，口縁部文様帯は狭く，等間隔に短い沈線が縦位にほどこされているのみである。ゆるい波状口縁を呈し，複節LRL縄文が横位にほどこされている。

II群A2類：2点（同26・27）。いずれも平らな口縁である。1点は末端の他条結縛部が明瞭な直前段反撚のRRL縄文を横位に（同26），もう1点は単節RL縄文を横位にほどこしている（同27）。

II群B1類：2点（同28・29）。I群A1類・II群A1類と同様に，口縁部文様帯は狭く，等間隔に短い沈線が縦位にほどこされているのみである。1点は平らな口縁（同28），もう1点は口縁上に突起を有する（同29）。口縁部文様帯以下に，原体の末端，あるいは側面にも環を作り出した「ループ文」が重層的にほどこされている。

II群B2類：4点（同30～33）。1点のみ波状口縁を呈す（同33）が，他は平らな口縁である。いずれも「ループ文」が重層的にほどこされている。

V群とされる底部片は5点みられた。いずれも平底とみられるが，小破片のみであり，底部径を復元できるものはなかった。

V群A類：2点（同34・35）。網代圧痕がみられる。一方は幅広の繊維，もう一方は細い繊維を用いているという差異があった。

V群C類：3点（同36～38）。底部径を復元できる残存状態のものはなかった。

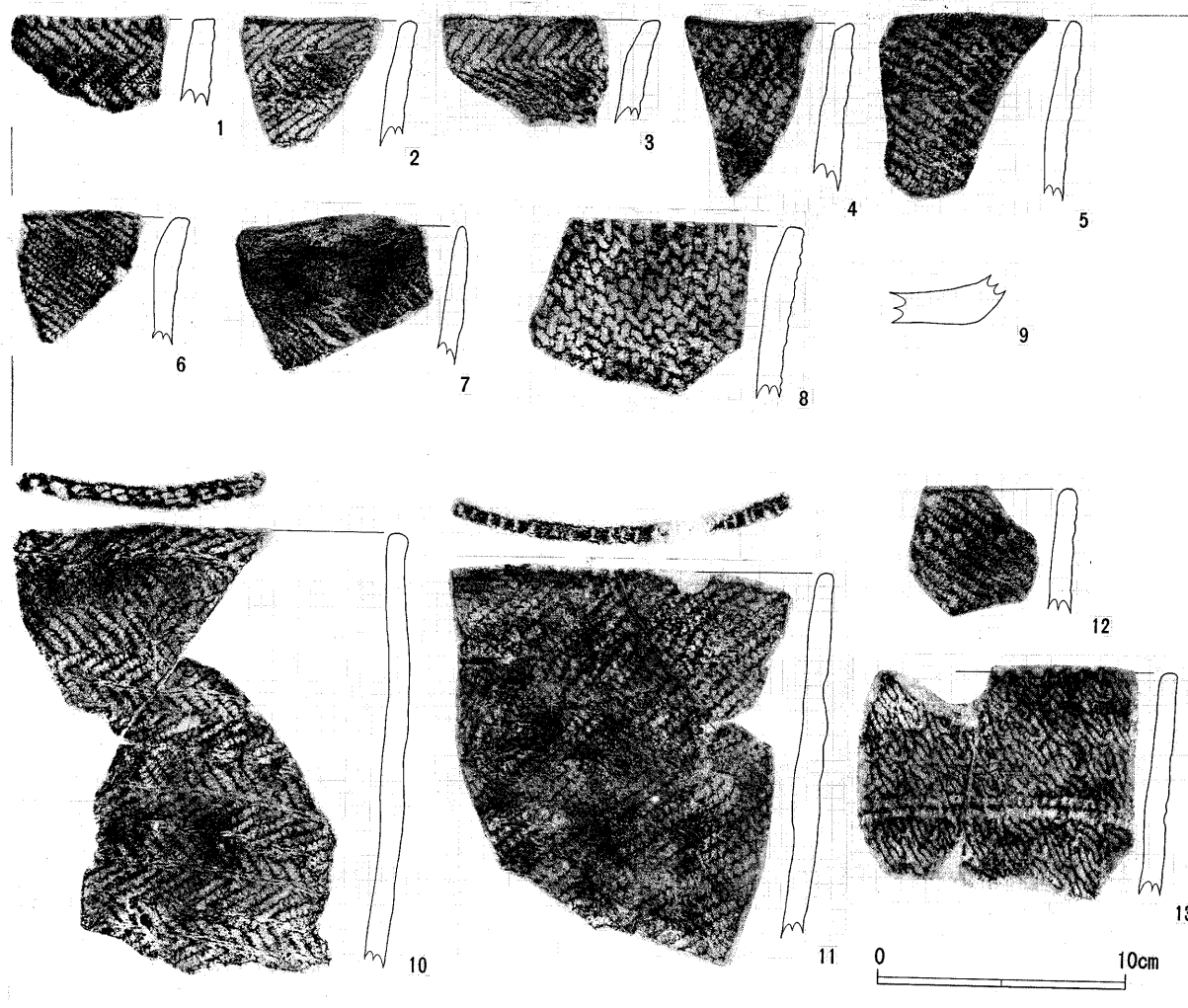


図5 ろ地点第2層（1～9），同第3層（10～13）出土土器片拓影（縮尺3分の1）

1：Ⅰ群A1類，2・3・10：同A2類，5～7・11・12：Ⅱ群A2類，8：Ⅲ群，9：Ⅴ群C類，13：Ⅳ群。

#### い地点第2層の自然遺物

本層からは自然遺物も若干出土している（写真2・3）。以下にそれらの名称と点数を示す。

マグロ属椎骨7点。同尾部棒状骨+下尾軸骨1点。

マダイ左前上顎骨1点。同右主上顎骨1点。

タイ科椎骨2点。

不明鳥骨1点。

ニホンジカ角3点。いずれも加工痕がみられた。

不明頭蓋骨3点。

不明骨片3点。

自然遺物は土器に比して少量であるが，その中でも外洋魚が多いことは特筆すべきであると考えられる。

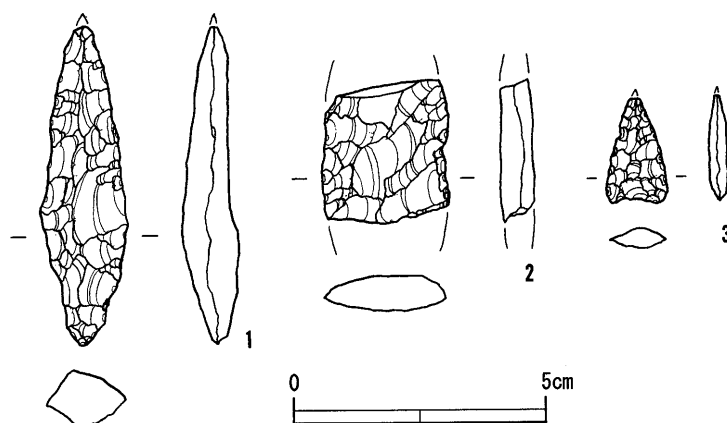


図6 ろ地点出土石器実測図（縮尺3分の2）

1・2：石槍，3：石鏃。

### ろ地点第2層の土器

縄文中・後期土器とみられる土器片を含む土器片の構成は口縁部片10点，胴部片64点，底部片1点である。

そのうち縄文前期初頭とみられる口縁部片8点を分類別に示すと次のようになる。いずれも繊維混入の痕跡が顕著であった。

I群A1類：1点（図5-1）。い地点第2層出土資料と同様の口縁部文様帯をもつ。等間隔，縦位にほどこされた短い沈線は「い地点第2層」出土のものにくらべて若干太いが，文様構成は同様である。原体末端の他条結縛部が明瞭である。

I群A2類：2点（同2・3）。両例とも原体末端の他条結縛部が明瞭である。1点は結束された羽状縄文である（同3）。

II群A2類：4点（同4～7）。縄文原体に若干のバリエーションがある。1点は複節LRL縄文（同4），2点は単節RL縄文（同5・6），1点は無節R縄文（同7）が横位にほどこされている。

III群：1点（同8）。I群A1類，II群A1・B1類と同様の口縁部文様帯をもつ。

V群とされる底部片は1点のみであった。底面が無文のV群C類（同9）。平底である。底部径が復元できるほどの残存状態ではなかった。

### ろ地点第2層の自然遺物

本層からも自然遺物が若干出土している（写真2・3）。以下にそれらの名称と点数を示す。

マグロ属椎骨6点。

ニホンジカ右肩胛骨1点。同左脛骨遠位端1点。

い地点第2層と同様に，マグロ属が多いのが特徴である。

### ろ地点第3層の土器

縄文中・後期土器とみられる土器片を含む土器片の構成は口縁部片4点，胴部片126点，底部片はみられなかった。

そのうち縄文前期初頭とみられる口縁部片4点を分類別に示すと次のようになる。いずれも繊維混入の痕跡が顕著にみられた。



I 群 A 2 類：1 点（図 5 - 10）。口唇部にも縄文がほどこされている。原体末端の他条結縛部が明瞭である。

II 群 A 2 類：2 点（同 11・12）。1 点は口唇部にも縄文がほどこされ、複節 L R L 縄文が横位にほどこされたものである（同 11）。もう 1 点は単節 R L 縄文が横位にほどこされている（同 12）。

IV 群：1 点（同 13）。口唇部は連続的に押捺され、口端部には等間隔に短い沈線が縦位にほどこされている。無節の縄文をゆるく結束した結節部が重層的にほどこされ、その上に 2 列の刺突が横位にほどこされている。

### ろ地点第 3 層の自然遺物

本層からも自然遺物が若干出土している（写真 2・3）。以下にそれらの名称と点数を示す。

クボガイ 1 点。

マガキ 1 点。

マグロ属椎骨 3 点。

スズキ右主鰓蓋骨 1 点。

イノシシ右距骨 1 点。

ニホンジカ角 3 点。いずれも加工痕が観察された。内 1 点は角座であり、自然落下した鹿角を採集したものと考えられる。同頸椎 1 点。同左距骨 1 点。

不明骨片 3 点。

また、ヒトの左中足骨が 1 点みられた。

陸産哺乳類が他の層にくらべて多くみられるが、マグロ属がみられる点で他の層と特徴をともにしている。

### ろ地点層位不明の石器

石槍 2 点、石鏃 1 点の計 3 点である。

石槍 1（図 6 - 1）：先端部にわずかな欠損がみられるのみで、ほぼ完形である。長さ 6.2cm，幅 1.7cm，厚さ 1.1cm，重さ 10.1g である。

石槍 2（図 6 - 2）：体部の破片とみられる。石匙などと異なり、主要剥離面を大きく残すことなく細かく剥離がなされていることから判断した。残存長 2.8cm，幅 2.5cm，厚さ 0.7cm，重さ 6.8g である。

石鏃（図 6 - 3）：先端部にわずかな欠損がみられるのみで、ほぼ完形である。長さ 2.0cm，幅 1.2cm，厚さ 0.4cm，重さ 0.8g である。

### 地点不明の土器

縄文中・後期土器とみられる土器片を含む土器片の構成は口縁部片 110 点，胴部片 599 点，底部片 18 点である。

そのうち縄文前期初頭とみられる口縁部片 75 点から、小破片を除いた 65 点と底部破片 1 点を分類別に示すと次のようになる。繊維混入の痕跡は顕著であった。

I 群 A 1 類：6 点（図 7 - 1～6）。いずれも文様構成は他地点における同類と同様である。1 点のみゆるい波状口縁を呈している（同 6）。結束された羽状縄文は 3 点みられた（同 3～5）。

I 群 A 2 類：口縁部破片 42 点（同 7～42，図 8 - 1～9）。底部破片 1 点（同 10）。すべて原体末端の他条結縛部が明瞭であった。1 点のみ、いわゆる「複合口縁」を呈す（図 7 - 7）。2 点が波状口縁

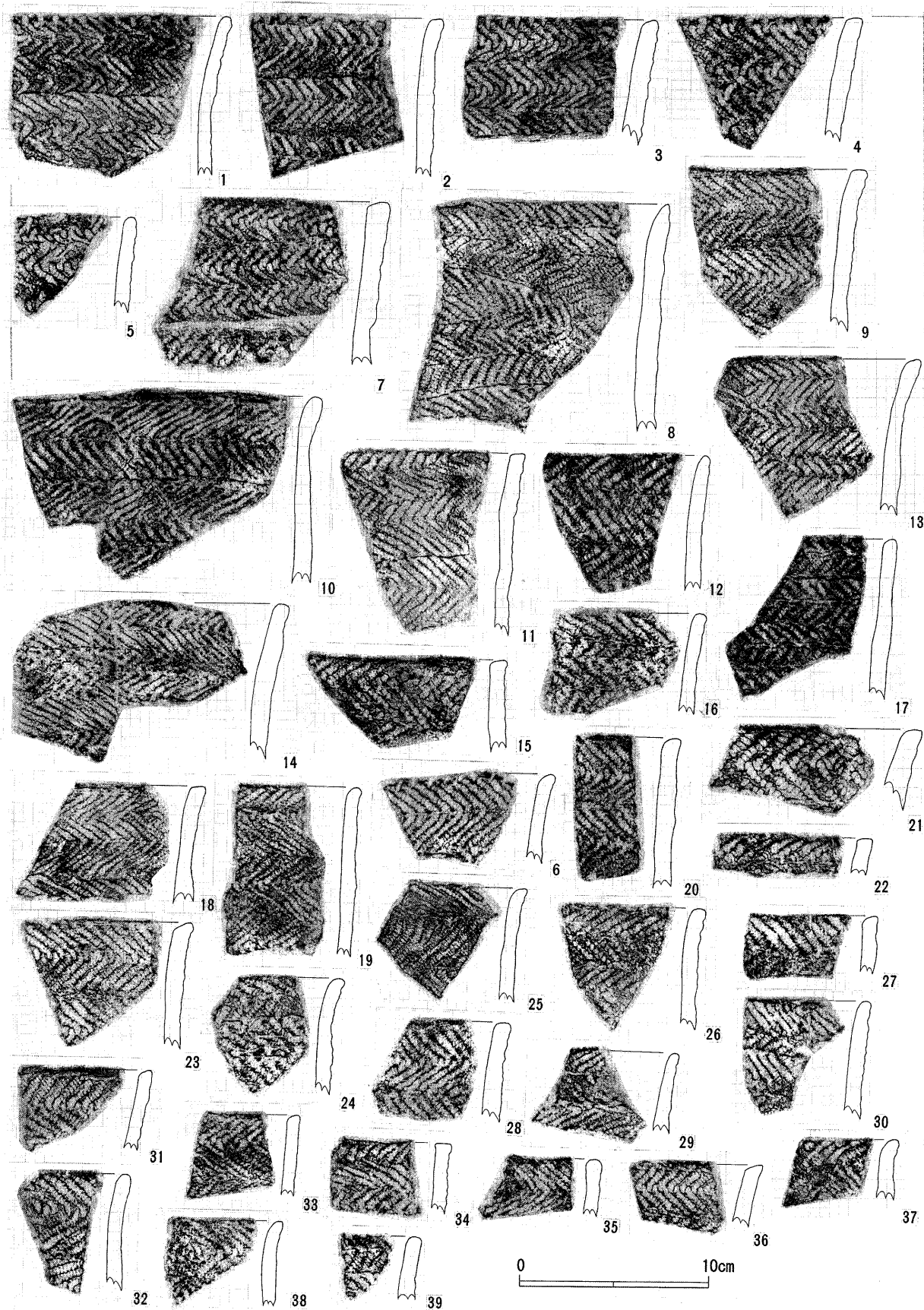


図7 出土地点不明土器片拓影1 (縮尺3分の1)  
 1～6: I群A1類, 7～42: 同A2類.

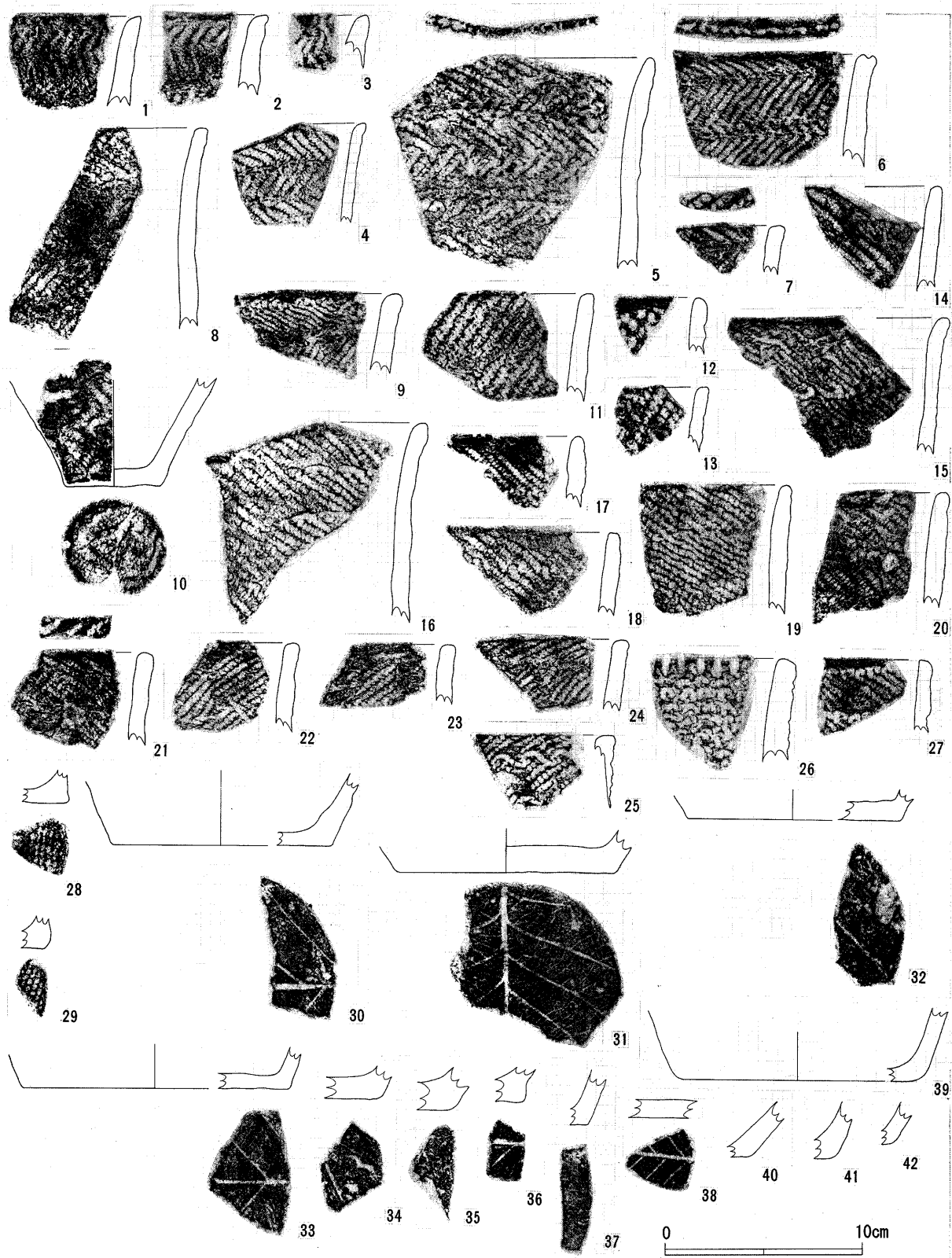


図8 出土地点不明土器片拓影2 (縮尺3分の1)

1～10：Ⅰ群A2類，11～25：Ⅱ群A2類，26：同B1類，27：同B2類，28・29：Ⅴ群A類，30～38：同B類，39～42：同C類。

を呈し(図8-4・5), 3点が口唇部にも縄文がほどこされたものである(同5~7)。それ以外は既述の同類と同様、平らな口縁を呈し、口唇部も無文である。底部破片は底面にも羽状縄文がほどこされている。底部径は4.8cmである。結束された羽状縄文は16点みられた(図7-7・9・18~21・23・28・31~33・36・38, 図8-5・9・10)。

I群B2類:15点(同11~25)。すべて平らな口縁を呈し、縄文は横位にほどこされている。縄文原体に次のようなバリエーションがある。複節LR縄文2点(同11・12)。複節RL縄文1点(同13)。単節RL縄文8点(同14~21)。単節LR縄文4点(同22~25)。うち一点は結束をもつ(同25)。

II群A1類:1点(同26)。口縁部文様帯は他地点における同類と同様である。「ループ文」が重層的にほどこされている。

II群A2類:1点(同27)。「ループ文」が重層的にほどこされている。

V群とされる底部片は次のとおりである。

V群A類:2点(同28・29)。底部径を復元できるような残存状態のものはなかった。

V群B類:9点(同30~38)。底部径を復元できたものが他に比べ多いが、その復元径は上述のI群A2類の底部にくらべて大きい。

V群D類:4点(同39~42)。1点のみ底部径を復元できた(同39)が、そのほかは底部径を復元できなかった。

尖底から平底へと底部形態が移り変わりつつある縄文前期初頭において、他遺跡で同時期に位置付けられる土器群では、平底の底部もみられるため、底部片もすべて提示したが、B類については残存した胴部に研磨が著しいものがあり、若干数出土している縄文中・後期の口縁部破片に対応する可能性が高い。A・C類についても、確実に縄文前期初頭に伴うと言えるものはない。他地点出土の底部片も同様であり、確実に口縁部破片と同様に縄文前期初頭に位置する底部片は、上記のI群A2類1点(図8-10)のみである。

#### 地点不明の自然遺物

地点不明の資料にも自然遺物が若干みられた(写真2・3)。以下にそれらの名称と点数を示す。

スガイ1点。

オオヘビガイ1点。

レイシ1点。

マガキ右殻3点。

オキシジミ左殻1点。

アサリ左殻1点。

マグロ属椎骨3点。

マダイ額骨1点。同右前上顎骨1点。同右主上顎骨2点。同左歯骨1点。同上後頭骨1点。

不明鳥骨1点。

イルカ科椎骨1点。

イノシシ右上腕骨遠位端1点。

ニホンジカ角3点。いずれにも加工痕が観察され、うち1点は角座であった。同左中足骨近位端1点。同基節骨1点。

そのほか不明骨片が14点みられた。

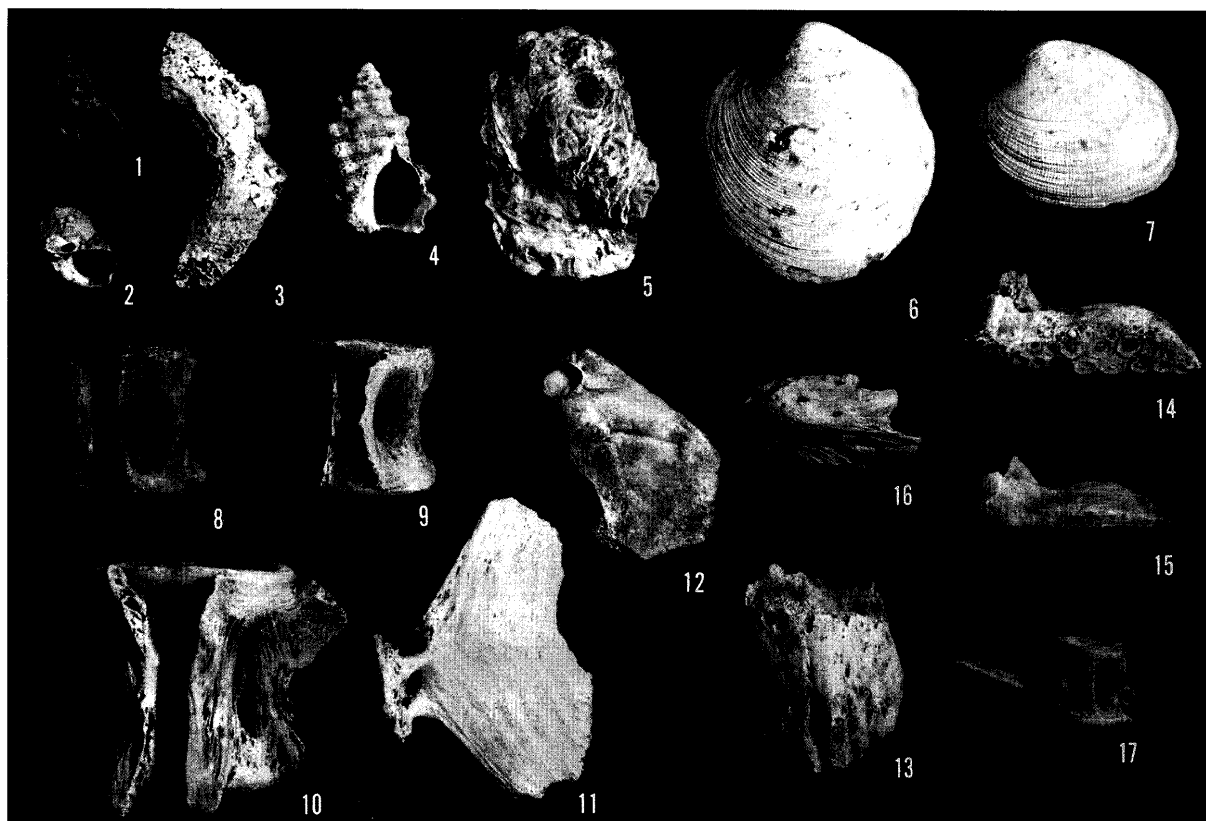


写真2 自然遺物1：貝・魚類（縮尺3分の2）

1：クボガイ，2：スガイ，3：オオヘビガイ，4：レイシ，5：マガキ，6：オキシジミ，7：アサリ，  
8～10：マグロ属椎骨，11：同尾部棒状骨+下尾軸骨，12：スズキ主鰓蓋骨，13：マダイ額骨，14・15：  
同前上顎骨，16：同歯骨，17：タイ科椎骨。



写真3 自然遺物2：哺乳類（縮尺2分の1）

1：ヒト中足骨，2：イルカ椎骨，3：イノシシ上腕骨，4：同距骨，5・6：ニホンジカ角，7：同頸  
椎，8：同肩胛骨，9：同距骨，10：同中足骨，11：基節骨。

### まとめと若干の考察

本貝塚の資料の特徴は、記録の一部は不完全ながら、地点、層位別にまとまりをもった縄文前期初頭土器がみられたことと、その中から全形が復元できる土器が得られたこと、そして貝塚を特徴づけ、かつ貝塚が研究上重要である理由のひとつともなっている自然遺物についても、若干数が確認できたことである。

自然遺物の特徴はマグロが多いことである。大型の椎骨であり、調査時、目に付きやすいということをも勘案しても多いと言える。漁具の様相などから、仙台湾沿岸が「外洋性漁業」のセンター的性格を強く帯びるのは縄文中期末からであるが(渡辺1973)、縄文前期初頭段階には、すでに外洋への適応を深める端緒は開かれていたようである。

人骨も1点見出され、今後の調査によっては埋葬人骨の出土も期待できる。

次に、出土土器について若干の考察をおこなう。

復元された個体(図3)は、林謙作氏が「桂島式」を設定する際に報告した宮城県塩釜市桂島貝塚出土土器(林1960)と類似している。本貝塚例は丸底に近い尖底であるが、桂島貝塚例は、上げ底に近い平底と尖底の両方が出土している。体部文様については同様であっても、底部形態についてはバリエーションがみられるのが特徴である。本資料も、ともに同様の羽状縄文がみられる復元個体の尖底1点、底部片の平底1点を得た。この時期は平底化に向かいつつあるものの、過渡的な時期であると言える。

出土地点、層位別に分類した口縁部片各別の構成を示したのが表1である。複数層位出土の資料から構成される「ろ地点」においては、層位の上下関係が不明であるという問題がある。さらに「ろ地点」においては口縁部の破片数が少なく、明瞭な変化は見出しにくい。したがって「い地点第2層」および「地点不明」、そして資料全体の組成比から本資料の特徴を読み取るしかない。その3者の組成比は類似しており、主体を占めるのは復元個体を得たI群A2類であることがわかる。同類の特徴は短い縄文原体による横位の羽状縄文が、おそらく復元個体にみるように、帯状に全面にほどこされることである。

表1 地点・層位別口縁部片(復元個体含む)の数量表

	I群：羽状縄文			II群：斜行縄文およびそのバリエーション				III群：組紐回転文	IV群：結節回転文	計
	A1類	A2類	B類	A1類	A2類	B1類	B2類			
い地点第2層 (%)	1 (2.9)	23 (67.6)	1 (2.9)	1 (2.9)	2 (5.9)	2 (5.9)	4 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	34 (100.0)
ろ地点第2層 (%)	1 (12.5)	2 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)	8 (100.0)
ろ地点第3層 (%)	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
地点不明 (%)	6 (9.2)	42 (64.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (23.1)	1 (1.5)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	65 (100.0)
計 (%)	8 (7.2)	68 (61.3)	1 (0.9)	1 (0.9)	23 (20.7)	3 (2.7)	5 (4.5)	1 (0.9)	1 (0.9)	111 (100.0)

このような例が主体を占めることも「桂島式」に類似している。口縁部文様帯があるとしたⅠ群A 1類も、口端部にわずかに沈線が加えられるのみであり、頸部に同様の文様がほどこされ幅広の口縁部文様帯を形成していた可能性はあるものの、対応する胴部片はみられなかった。明瞭な装飾文様帯をもたないという点においても、「桂島式」に類似していることになる。若干の相違点は、本資料は桂島貝塚出土土器にみられない「ループ文」と組紐回転文がみられることである。

「はじめに」の項目でも述べたように、本資料は山内博士が「室浜式」としたものと若干内容が異なるようである。博士の言う「体にはほとんど皆斜行縄文がある。その過半は結束ある帯縄文である。口端には往々点列がある」まではほぼ同様であるが、後に「室浜式」が「上川名式」と同様のものであろうという推定のもととなった後段の記述とは相違点がある。「少数」にみられるとされた「装飾文様帯」のうち、「半截竹管様のものによる文様」は1点みられたものの、「整正な撚糸圧痕による文様」はまったくみられなかった。明瞭な装飾文様帯をもつ資料自体がⅠ群B類の1点しか存在せず、その胴部文様は主体を占める羽状縄文とは異なる施文方法であった。この点については、「桂島式」についても指摘されているように、装飾文様帯をもつ土器とそれをもたない土器のうち、後者のみが偶然にもまとまって出土した<sup>2)</sup>、と解釈することも可能である。しかし、桂島貝塚出土土器は林氏によれば口縁部を含む破片19点における傾向であるのに対し、本資料の「い地点第2層」資料は復元個体を含めれば口縁部資料は34点を得た上での傾向である。「地点不明」のものも含めれば資料数はさらに増加し、かつ両者の組成の特徴は一致している。したがって、このような装飾文様帯をほとんど持たない土器群になんらかの意味を与える可能性も残されている。いずれにせよ、本資料がそのような議論に影響を与えるものと位置付けられるとすれば、角田博士の提唱した「浦口式」という名称と、設定当時の「舟入島下層式」と「上層式」の間を埋める土器型式であるという問題意識は、再評価されるべきであると考えられる。

## 謝 辞

本稿作成にあたって、その機会を賜るとともに種々ご教示いただいた角田文衛博士、および渡辺誠名古屋大学名誉教授に御礼申し上げます。

## 註

- 1) 青森県榎林遺跡出土土器、東北地方各地出土のアメリカ式石鏃についての2報告は、『古代文化』誌に投稿中である。
- 2) たとえば、相原氏は自身の論文(相原1990)中の註27において同様の見解を述べている。

## 引用文献目録 (アルファベット順)

- 相原淳一(1990) 東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－。考古学雑誌, **76-1**, 1-65.
- 林 謙作(1960) 宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群。考古学雑誌, **46-3**, 20-32.
- 加藤 孝(1951) 宮城県上川名貝塚の研究－東北地方縄文式文化の編年学的研究－。宮城学院女子大学研究論文集, **1**, 183-199.
- 角田文衛・三森定男(1939) 先史時代の東部日本。人類学・先史学講座, **12**.
- 渡辺 誠(1973) 縄文時代の漁業。
- 山内清男(1930) 繊維土器に就いて－追加第二－。史前学雑誌, **2-1**, 73-75.

(2004年10月25日受付, 2004年11月20日受理)